

## 大阪ブルーノートを偲んで

### ～名ドラマー、ウィルソン・ダス・ネーヴィスとの出会い

#### はじめに

2007年8月8日、関西のジャズファンのみならず、西日本の音楽ファンを震撼させた出来事があった。大阪ブルーノートの閉店である。17年間続いたこのライブハウスは、ジャズというジャンルに収まらず、国内外の様々なジャンルの大物ミュージシャンが出演することでも知られていた。関西の音楽発信地の一つがなくなってしまったということは多くの人々をすこぶる落胆させた。弱冠20代の私も、学生時代に大好きなアーティストの演奏を実際に自分の目で見るべく、なけなしのお金をはたいて通ったことを懐かしく思う。個人的な話になるが、大阪ブルーノートでは、故オスカー・ピータソンやチック・コリアなどのジャズの巨匠に加え、マルコス・ヴァーリ、ジョイス、ジョニー・アルフ、アジムス、アイルト・モレイラ、フローラ・プリン、ワンダ・サー、ジョアン・ドナート、Saigenji など、私のリスペクトする多くのブラジル系ミュージシャンの演奏を体感させてもらった。それらの一つひとつが生涯忘れることのできない貴重な財産となっている。今回、大阪ブルーノートを偲び、私の中で今も記憶に残る大阪ブルーノートにまつわる一つの思い出話を紹介したいと思う。

#### 1. ジョアン・ドナート&ワンダ・サー来阪

##### ～バックにドラマー、ウィルソン・ダス・ネーヴィス

2003年11月、ブラジル音楽の巨匠でピアニストのジョアン・ドナートと、ボサノヴァ歌手の大御所ワンダ・サーが来日し、大阪ブルーノートでもコンサートを行った。彼らの来日を知り、私はすぐさまチケット購入に走ったのであるが、当時の私にはもう一つのお目当てがあった。それは、彼らのバックを務めるメンバーとして、ブラジルのドラマー、ウィルソン・ダス・ネーヴィスの名前がクレジットされていたからである。1936年6月14日にリオ・デ・ジャネイロに生まれたウィルソンは、早くから音楽活動を開始し、1960年代後半から何枚かのリーダー作を発表する傍ら、現在に到るまで数多くのミュージシャンのサポートメンバーとして活躍。共演者にはサラ・ヴォーン、エリス・ヘジーナ、シコ・ブアルキをはじめ錚々たるメンバー等、枚挙に暇が無い。彼の中古レコードは数万円の値がつくものもあるほどである。私の友人で、共にこの日のライブを体感したボッサ・トレビアンレコーズの岩根氏は、ウィルソンのことを「百戦錬磨のドラマー」と賞賛、「1960年後半から現在までのブラジルレコードを無造作に10枚選んだとしたら、それらのどこかに必ずウィルソン・ダス・ネーヴィスの名前があるのでは？」とさえ

言っていた。そんなブラジルが誇る名ドラマーの演奏を実際にこの目で見られるという喜びと期待感で、私の胸は高鳴っていた。

ライブ当日、ブルーノートに入店した私は友人たちと共に前の方に席を陣取り、いよいよライブを待つのみとなった。開始まで少々時間があったので、友人たちを残し私は一人トイレへと向かった。大阪ブルーノートのトイレは正面から見て左奥の、過去に出演したミュージシャンたちの写真やサインの入ったポートレートの飾られた通路のさらに奥にあった。トイレの扉を開ける前に、秩序正しく並べられたジャズジャイアンツたちの白黒写真を眺めていると、一人の髭を生やした色黒の老いた外国人男性がトイレから出てきた。もしやと思った私は、「あなたはウィルソン・ダス・ネーヴィスさんですか?」とたずねた。その老人は足を止め、彫りの深い味のある顔をほころばせ、「そうだよ。私がウィルソンです。」と答えてくれた。ポルトガル語を話す日本人が珍しかったのか、自分のことを知っているファンがいてうれしかったのか、私たち二人は意気投合し、トイレへ行くのも忘れていろいろなことを話した。そしてライブの後また話そうと言って、彼は楽屋へと入って行った。

その後のライブの内容は、後に起こったことがすごすぎて正直あまりよく覚えていない。記憶にあることと言えば、ブラジルピアノの巨匠ジョアン・ドナートのパーカッシヴで陽気なピアノが絶妙に心地よかったことと、直前に知り合ったウィルソンが、小気味よいリズムをきざみながら何度も演奏中に私の方に向かってウィンクしてくれたことだ。一緒にいた友人たちから聞くと、ワンダ・ダーの歌声はとてもよかったが、往年の独特のハスキーヴォイスはもう聞くことはできなくなっていたようだ。ライブ終了後、サインを求めて多くのファンが楽屋に列を作っていた。大阪ブルーノートは、ミュージシャンさえ応じてくれれば気軽にアーティストにファンを会わせてくれたり、写真をとってくれたり、サインに応じてくれるなど、アットホームな雰囲気が非常によかった。この日わかったことだが、トイレもミュージシャンと客とが同じ場所を使用していたようだ。なんとアットホームなことか! 私は大阪ブルーノートに感謝しなければならない。ワンダ・サーは楽屋の奥に入っていたので、ジョアン・ドナート、ウィルソン・ダス・ネーヴィス、ベースのルイス・アルヴィスにサインをしてもらい、ウィルソンを私の友人たちに紹介した。サイン会終了後、ウィルソンは宿泊しているヒルトンホテルに私と友人たちを招待してくれた。私はドラムの後片付けを手伝い、共にブルーノートの出口より出て、近くのヒルトンホテルまで歩いた。この時の私は、ミュージシャンと共に会場から外に出て通りを歩くという行為がなんとも不思議な心地がしてたまらなかったのを記憶している。

秋も終わろうとしていたその夜はとても寒く、黒いハットをかぶり、黒のロングコートに赤いマフラーで身を包んでいたウィルソンはとても上品で紳士的であった。ヒルトンホテルのエレベーターを上がり、自室に案内してくれたウィルソンは、しばし私たちと語り、冷蔵庫に入れておいた牛乳を、パックごとさもおいしそうに飲み干した。そして私たちに、ブラジルに帰る前におみやげを買って帰りたいということを話してくれた。ウ

ウィルソンが探していたおみやげは柔道着であった。彼の息子のウィルソン・ダス・ネーヴィス・ジュニオール（ジュニア）は柔術家であり、柔道の母国である日本に行く父に柔道着を買ってくるように頼んだらしい。ほんの数日滞在予定で来ている外国人のウィルソンにとっては、道着がどこに売っているのかさえわからなかったそうだ。しかも翌日が帰国日だという。ライブ終了後のこんな夜遅くに開いているお店などあるはずもない。私は彼に住所を聞き、道着を見つけてブラジルへ直接送ることを約束した。彼は非常に喜び、安心したようだった。そしてお礼に今回の来日時一枚だけ持ってきていたという、1996年に出版された彼の最新作のCD「O Som Sagrado de Wilson das Neves」にメッセージを書いて私にくれた。ライブ後の疲れが出たのか、息子へのおみやげがなんとかあって安心したのか、それに彼は少々疲れも感じられたので、私たちは隣の部屋に宿泊していたジョアン・ドナートにもう1度別れを告げ（ドナートは持っていたLPと色紙にサインもくれた）、ウィルソンと再会を誓い合ってヒルトンホテルを後にした。

## 2. 2004年2月、いざリオ・デ・ジャネイロへ

### ～ウィルソンとの再会～

その三ヶ月後、私は予定していた渡伯を執行し、リオ・デ・ジャネイロでウィルソン・ダス・ネーヴィスと再会することとなる。場所はMPBミュージシャンの殿堂とも称されるリオのカネカオン。ブラジルに着いてから電話で連絡をとった際にウィルソンは、「オーケストラのライブにゲスト出演するので来るように」とのことであった。オーケストラというからには、クラシックのコンサートか何かだろうと勝手に想像しながら、私は友人の岩根氏と共にカネカオンに入った。そこでは、ウィルソンの友人が私たちを待っていており、楽屋まで連れて行ってくれた。そこで我々は約三ヶ月ぶりの再会を果たしたのである。はるか日本から来た私たちを、ウィルソンをはじめ16歳の孫のナターシャ、そしてオーケストラのメンバーたちは大歓迎してくれた。楽屋には10数人はいるであろう、カーニバルやハロウィンの衣装かと思うほどの、カラフルで奇抜な衣装に身を包んだオーケストラのメンバーをはじめ、テレビや雑誌の取材も入っていて大変賑わっていた。

個性豊かな衣装をまとっている10数人のオーケストラメンバーを見て、これがクラシックのコンサートではないことが容易に想像できた。ウィルソンの説明によると、オーケストラの中にはオーケストラの中心的人物で、カエターノ・ヴェローゾのプロデューサーでも知られる新進気鋭のアーティストでベーシストのカシン、カエターノの息子モレーノ・ヴェローゾ、カエターノのサポートでも知られるギタリストのペドロ・サーをはじめ、多くの才能ある若手ミュージシャンが集結しているとのことであった。楽屋では、来日経験もあるフランス人でブラジル在住のドラマー、ステファン・サン・ジュアンや同じくドラマーのドメニコ、先に書いたカシン（ちなみに彼は日本人のヒロミさんと結婚して

ナラちゃんという娘さんがいる)、ヴォーカルも務めるホーン楽器専門のマックス・セッチが特にいろいろと我々に話しかけ、オーケストラについての話をしてくれた。そのオーケストラの名前は“オーケストラ・インペリアル (宮廷のオーケストラ)”といった。アルバムはまだ発売していないが、伝統的なサンバを現代風アレンジした演奏で、様々な若手ミュージシャンがカーニバルの時期に集まり、楽しく演奏するパーティーバンドで、リオ若者たちに今大人気であるとのことであった。かつてメンバーにはセウ・ジョルジも参加していたそうである。後日談ではあるが、その4年後の2008年1月にファーストアルバムを日本でリリースし、またたくまに日本でも注目の的となっているこのオーケストラ・インペリアルというオーケストラ集団は、当時はまだ日本では全く知られていない存在であった。

楽屋では、当然のことながらウィルソンが一番年配で、メンバー全員からリスペクトされる長老的存在であるのがわかる。私の持参した過去のLPを見ながら、録音背景や1970年代のブラジル音楽シーンについて説明をするウィルソンの話にはメンバーたちは目を輝かせて聞き入っていたのが印象に残っている。この時の楽屋での様子を記録した私のビデオが残っているが、それを見ると今でも微笑ましい気持ちになる。また、この時の渡伯で、かつての名ドラマー、ウィルソン・ダス・ネーヴィスは、ドラムの仕事もこなしながら近年はヴォーカリストとしても活躍していることがわかった。

ライブが始まるということで、孫のナターシャと私たちは楽屋を出てアリーナ席へと案内され、ライブを見ることとなる。ウィルソンは自慢の歌声を披露してくれるようで、好物のビールで喉をガラガラとうがいする豪傑ぶりを見せていた。初めて見たオーケストラ・インペリアルのライブは本当にすばらしかった。観客層はリオの若者中心で、伝統的なサンバに根ざした彼らの音楽に観客たちは体を揺らして踊っていた。近年、ブラジルのテレビ番組などでは商業的なセルタネージャやブラジルのB級ポップスなどが流行し、トラディショナルな音楽がないがしろにされている感が私にはあったが、そんな不安を払拭させるようなライブの内容と、観客の反応であった。カリオカもまだまだ捨てたもんじやない、と私は真からそう思った。

### 3. 今を時めく若手の結集したオーケストラ・インペリアル

オーケストラ・インペリアルは総勢19人の大所帯のグループである。この個性的な一大オーケストラを率いるのはカシン (ベース) とベルナ・セップス (音響)。二人のメインヴォーカル、タルマ・ジ・フレイタス (彼女の父はタンバ4にも参加していた著名なピアニスト、ラエルシオ・ジ・フレイタス)、ニーナ・ベッカーを筆頭に、モレーノ・ヴェローゾ (ヴォーカル、ギターなど)、ドメニコ (ドラム)、ペドロ・サー (ギター)、ステファン・サン・ジュアン (パーカッション、ドラム)、ホドリーゴ・アマランチ (ヴォーカル)、マックス・セッチ (トランペット、サクソ、ヴォーカルなど)、フビーニョ・ジャコビーナ

(キーボード、ボーカル)、ネルソン・ジャコビーナ (ギター)、バルトーロ (ギター)、フェリピ・ピナウチ (フルート)、ビドウ・コルテイロ (トロンボーン)、マウロ・ザシャリアス (トロンボーン)、レオ・モンテイロ (パーカッション)、セーザル・ファリアス “ボダオン” (パーカッション)、ウィルソン・ダス・ネーヴィス (パーカッション、ヴォーカル) が現在の正式メンバーだ。また、ゲストにはカエターノ・ヴェローゾやマリーザ・モンチなども参加したことがあるほど、多くのミュージシャンたちから期待される一大オーケストラなのである。ライブの途中では、ウィルソン・ダス・ネーヴィスがしばしばオリジナル曲”O Samba é meu dom”を披露する。彼の洪い声とあまたの大物ミュージシャンたちと共演を重ねてきたことから湧き出るそのオーラは、さながら「現代のカルトーラ」である。彼の口癖 “Ô Sorte” も絶好調に響き渡っていた。数時間にも及ぶライブは会場にいる全ての人々をハッピーにさせ、終了した。会場にはブラジル音楽評論家としてもつとに知られる中原仁氏も日本から足を運んでおられ、オーケストラのライブを初めて見ての衝撃と感動を、その後のラティーナにも記載しておられた。このことから、その時の圧倒的なライブとオーケストラ・インペリアル存在感を理解していただけたと思う。先にも少し触れたように、いくら感動したとは言え、この時見たオーケストラが数年後ここまで日本で注目される存在になるうとは当時の私には予期できなかった。

#### 4. 名ドラマー、ウィルソン・ダス・ネーヴィスの秘話

リオでの私たちの滞在中、ウィルソンは老舗ライブハウス “ミストウーラ・フィーナ” での自分のソロライブに招待してくれたり、自分の所属する名門サンバチーム “インペリオ・セハーノ” の練習風景を見せに連れて行ってくれるなど、大変お世話になった。カーニバル直前のインペリオ・セハーノの打楽隊の迫力にはただただ圧倒されるばかりであった。また、ウィルソンが縁で知り合ったオーケストラ・インペリアルのメンバー、カシン、ステファン、ドメニコ、モレーノも自分たちのコンサートに我々を招待してくれたり、マックス・セッチが自宅のパーティーに呼んでくれるなど、大変貴重な時間を過ごすことができた。この時マックスが言っていた。「オーケストラ・インペリアルは多くの才能ある若手ミュージシャンが集まっている。いつかみんな日本へライブに行きたい。ライブに行くなら一ヶ月は必要だ。なぜならメンバーはそれぞれのグループを持っているし、それだけでまずライブができる。そして、最後にオーケストラのライブで締めくくりだ。」いみじくも、その3年後の2007年にはカシン+2のアルバム、オス・ヒチミスタスのアルバムが出され、彼らの動向はますます注目されるようになってきている。

この旅の最後に、以前から聞きたかったことをウィルソンに聞いてみた。「なぜジャズの帝王マイルス・デイヴィスの誘いを断ったのか」ということである。(日本では、ウィルソンはアメリカ人トランペッター故マイルス・デイヴィスのグループにドラマーとして誘われたにもかかわらず、その誘いを断ったという逸話が知られている) 彼はその質問に対し

てきっぱりと言った。「その話は始めて聞いた。私はマイルスからの誘いは受けていないよ。」ウィルソンの口から直接その言葉が出てきて私は驚いた。マイルスがウィルソンの演奏を気に入ってメンバーに誘ったということが本当であれば、その願いは本人まで届いていなかったのである。もしその誘いが届いていればウィルソンはどうしていたのであろう？そんなことを勝手に想像しながら、私は帰国の途についた。

帰国後もウィルソンやオーケストラのメンバーとは時折連絡を取り合う仲で続けている。カーニヴァルの時期にインペリオ・セハーノのTシャツを送ってくれたり、新作が出来たらいち早く送ってくれる。まさに今が旬のオーケストラ・インペリアル若人たちを従えての再来日も非常に楽しみである。大阪ブルーノートでのトイレでの出会いから、私にはかくもハッピーな出来事が生まれた。ありがとう、大阪ブルーノート。大阪ブルーノートでの多くの音楽ファンたちのよき思い出は、かつて店内に飾られていたアーティストたちの肖像写真のごとく決して色褪せることなく、それぞれの心のポートレートとして残り続けるであろう。

2008年1月19日

青木義道